

薬史レター

日本薬史学会

J S H P



第71号

2014年6月

日本薬史学会第7回柴田フォーラム開催のご案内

世話人 御影雅幸 (東京農業大学・金沢大学名誉教授)

金沢大学角間キャンパスを会場にして日本薬史学会第7回柴田フォーラムを開催いたします。会員以外の方もお誘いの上、奮ってご参加下さい。

E-Mail : sasaki@p.kanazawa-u.ac.jp

葉書 宛先：〒920-1192 石川県金沢市角間町 金沢大学医薬保健研究域薬系分子生薬研究室 佐々木陽平

日 時：2014年8月2日 (土)

会 場：金沢大学自然科学研究棟1号館1階「薬学プレゼンテーション室」
(金沢大学角間キャンパス：〒920-1192 石川県金沢市角間町)

参加会費：無料

懇親会費：3,000円 (当日お支払い頂きます)

プログラム

13:30 受付開始

14:00 ~ 15:20

(1)「加賀藩士の家伝薬について」

長谷川孝徳 (北陸大学未来創造学部教授)

15:20 ~ 15:30 休憩

15:30 ~ 16:50

(2)「薬師如来像とその薬壺の研究から私が学び得たもの」

奥田 潤 (名城大学名誉教授：日本薬史学会名誉会員)

17:00 ~ 18:30 懇親会

会場 すみれ亭 (同一建物、講演会場近くです)

参加申込・連絡先

佐々木陽平 (金沢大学医薬保健研究域薬学系分子生薬学研究室)

TEL : 076-234-4441 FAX : 076-234-4491

申込締切

会場設営の関係上2014年7月25日 (金) までに申し込みください。

会場・会場へのアクセス

○会場および周辺地図は下記URLをご覧ください。
[www://kanazawa-u.ac.jp/university/access/image/kakuma1.pdf](http://www.kanazawa-u.ac.jp/university/access/image/kakuma1.pdf)

[JR をご利用の場合のアクセス]

○金沢駅から金沢大学角間キャンパスまで

・北陸鉄道バス

金沢駅東口6番乗り場より北陸鉄道バス <91/93/94/97系統> 金沢大学行きで「金沢大学自然研前」下車。360円

・タクシー

約20分、3,000円程度。行き先は「金沢大学自然研前」とお伝えください

[飛行機をご利用の場合のアクセス]

○空港 (小松空港) から金沢駅まで

空港出口より金沢駅までの連絡バス。

1,130円、約40分。スーパー特急をご利用ください。

○金沢駅から金沢大学角間キャンパスまで

上記 [JR をご利用の場合のアクセス] をご参照ください。

日本薬史学会2014年会(福岡)のご案内

年会長 笹栗俊之(九州大学大学院医学研究院臨床薬理学分野)

日本薬史学会2014年会を福岡市において11月に下記の要領で開催します。特別講演は長崎国際大学薬学部・教授 正山征洋先生と国東市民病院 佐藤裕先生にお願いしています。会員の皆様のご参加をお待ちしております。

【開催期日】2014年11月22日(土)

【会場】九州大学医学部 百年講堂

地下鉄箱崎線「馬出九大病院前」下車

徒歩8分、

福岡市東区馬出3丁目1番1号

(次頁の会場周辺地図をご参照下さい)

【主催】日本薬史学会

【年会事務局】九州大学大学院医学研究院

臨床薬理学分野

住 所：〒812-8582 福岡市東区馬出3-1-1

電 話：092-642-6082 Fax：092-642-6084

E-mail：kusuri@med.kyushu-u.ac.jp

【年会長】笹栗俊之(九州大学大学院教授)

【年会事務局】吉原達也(同 助教)

【懇親会】

年会終了後、年会会場である九州大学百年講堂で行います。

【研究発表演題の募集】

発表はすべて口演、時間は1演題20分を予定しておりますが、演題数によって多少の変更があります。

【発表演題の申込み】

発表者は発表申込みの時点で当会の会員に限ります。メールによる申込みは、以下の事項を記入の上、年会事務局にお送り下さい。

- ①研究発表演題名 ②発表者並びに共同研究者全員の氏名(発表者に○)と所属
- ③連絡者の氏名 ④所属 ⑤住所
- ⑥電話番号 ⑦Fax番号 ⑧E-mail

メールの件名は「演題申込み」とお書き下さい。

発表演題の締切：2014年7月25日(金)

【講演要旨の提出】

下記の要領に従って作成してください。

A4用紙を用い、余白は上下左右30mm、表題はMS明朝15ポイント、発表者氏名、所属は12ポイント、本文は10.5ポイントで、必ず枠内に収まるようにして下さい。

要旨提出の締切：2014年9月19日(金)

【年会参加申し込み】

下記の事項を記入し、年会事務局にお送り下さい。

- ①氏名(フリガナ)
 - ②日本薬史学会 会員・非会員・学生
 - ③所属 ④住所 ⑤電話番号 ⑥Fax番号
 - ⑦E-mail ⑧懇親会参加の有無
 - ⑨合計金額 ⑩薬史ツアー参加の有無
- メールの件名に「参加申込」とご記入下さい。

事前参加申込みは、10月31日をもって締め切ります。参加費は、本年は事前振込みとなります。10月31日までにお振込みください。それ以降は当日参加とさせていただきますので、当日にお支払い下さい。

【振込先】

郵便振替口座

口座記号番号：01710-5-139363

口座名称：日本薬史学会2014年会(福岡)

(ニホンヤクシガ ッカイニセンジ ユウネンカイ(フクオカ))

あるいは

ゆうちょ銀行 一七九店(店番179)

口座番号：当座預金 0139363

口座名称：日本薬史学会2014年会(福岡)

(ニホンヤクシガ ッカイニセンジ ユウネンカイ(フクオカ))

【参加費】

- ①年 会：会員
(事前参加4000円 当日参加5000円)
非会員(6000円) 学生(1000円)
- ②懇親会：会員・非会員5000円
学生1000円

【薬史ツアー】

2014年11月23日(日)9時～16時頃(予定)

九州大学馬出キャンパス

↓ 中富記念くすり博物館

↓ 吉野ヶ里歴史公園

九州大学馬出キャンパス(予定)

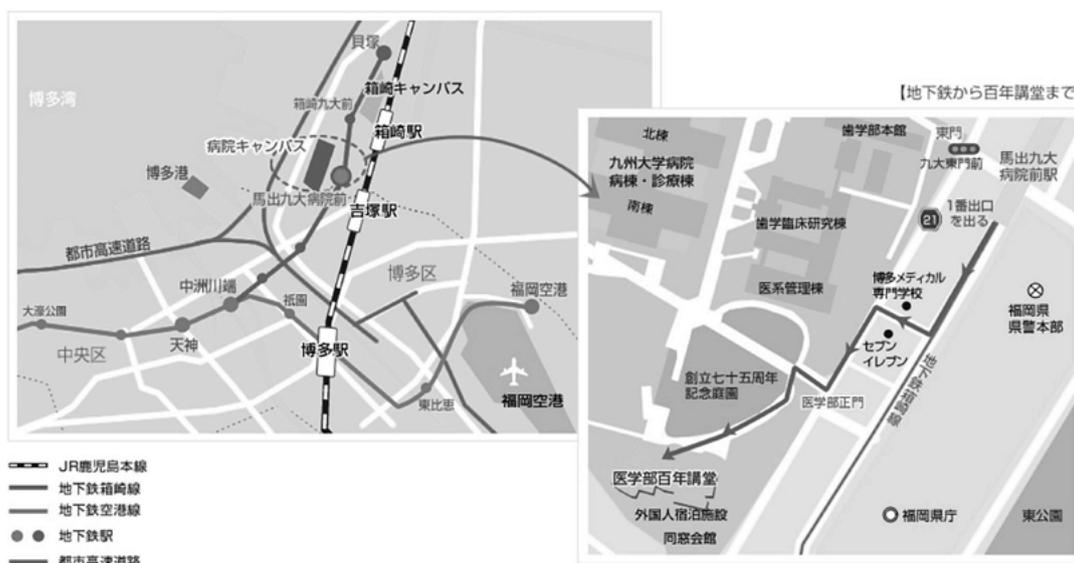
定員29名程度、料金3000円程度

(昼食代別、当日支払い予定)

【学会当日の昼食について】

会場の百年講堂カフェテリアや大学病院1階レストラン・喫茶、大学周辺の飲食店などがご利用頂けます。

会場へのアクセス(百年講堂のHP参照：<http://www.med.kyushu-u.ac.jp/100ko-do/>)



ジュリア・ヨング評議員が第87回米国医史学会年会で発表(報告)

米国医史学会(American Association for the History of Medicine: AAHM)の第87回目の年会在2014年5月8～11日、AAHMのシカゴ部会とシカゴ大学 Medicine and Biological Sciences学部の共催で開催された¹⁾。日本薬史学会会員で評議員のジュリア・ヨング氏(法政大学教授)が出席し、日本の製薬産業の大阪・道修町にある原点について発表した。

研究発表の演題名は“Between Regional Dynamics and Modernity: Tracing the Rebirth of a Japanese Medicine Industry in Osaka”であった。

初日(8日)は、個別の研究報告が行われず、2つの視察(tour)が実施された。一つは「医療と芸術」というテーマで、シカゴ大学にある Smart Museum of Artを訪れ、「身体」に関する作品を鑑賞した。もう一つは米国医師会のアーカイブの見

学であった。夕方からは、学会主催者であるハーバード大学の栗山茂久教授と薬史レター70号で取り上げられたジョーンズホプキンス大学の Jeremy Greene教授の特別上映会(Digital Short Films in the History of Medicine)が開催された。両教授が授業に取り入れている「映画制作」という画期的な教育方法について説明があり、意見交換が行われた。

米国の医史学会は、1923年に創設された歴史の長い学会である。本大会には研究者や教育者だけでなく、医師、看護師、薬剤師などが出席したほか、FDA(アメリカ食品医薬品局)のような機関のアーキビスト、博物館の学芸員、図書館員なども参加し報告を行った。多様性に富んだ大会であり、どの分科会も活発かつ関心深い議論が行われ、有意義な年会であった。

1)米国の医史学会のHP: <http://www.histmed.org>

日本薬史学会 2014 年会(福岡) 2014年11月22日

参加申込書 FAX : 092-642-6084
E-mail : kusuri@med.kyusyu-u.ac.jp

フリガナ		
①氏 名		
②所 属		
③住 所 〒		
④電 話	⑤ FAX	
⑥ E-mail		
⑦参加費 (○をつけて下さい)		
日本薬史学会 2014 年会		
会員 (4,000 円)	非会員 (6,000 円)	学生 (1,000 円)
懇親会		
会員・非会員 (5,000 円)	学生 (1,000 円)	
⑧薬史ツアー (○をつけて下さい)		
1. 参加する	2. 参加しない	

2014年度日本薬史学会総会報告

編集委員 小清水敏昌

平成26年4月19日(土)に標記の会が東京大学薬学系総合研究棟2階講堂で行われた。当日は晴れていたにも拘らず、風が冷たく感じるとても肌寒い一日だった。

総会は、午後2時過ぎに柳沢波香氏の司会により総会が始まった。議長に津谷喜一郎会長が着き、議事進行が行われた。昨年度の事業報告(三澤美和総務委員長)や決算報告(田引勢朗財務委員長)及び編集委員会関係(荒木二夫編集委員)が報告され承認を得た。学会長が任期を迎えるので、現会長の津谷先生の留任が提案され賛成多数で2014年、2015年度における会長として再任された。それに伴い、役員人事や運営組織についても承認され、新たに役員に就任した会員が紹介され各々が挨拶を行った。今年度の事業計画案及び予算案が提案説明された。特に予算関係では厳しい財政状況であることが説明され、新企画や会員の拡充などに取り組む必要があると感じた。

会長に選出された津谷先生から、本学会の創立60周年を記念し、また財政上である程度の資金を確保しておく必要があることから寄附金募集について説明があった。本学会の現状を鑑みると、止むを得ない方法かと思われた。特段の反対意見もなくこの件は承認された。募集期間は本年5月からスター

トし来年4月末日までとして一口5,000円である。

その他として、三澤総務委員長から報告があり、本学会創立60周年を記念し特集号を発行する。「わが国における医薬品産業現代史(1980-2010)」と題して本年6月に刊行予定であること、学会ホームページを充実するため英文ページを制作することや薬史レター・薬史学雑誌の論文を全文公開すること、学会員が執筆をして「薬学史事典」の編纂をする(出版予定来年3月末)こと、が説明された。

次に、新たに名誉会員として奥田潤常任理事が会長から推挙された。本学会における永年の功績及び薬師如来像の薬壺の研究を通して名誉会員たる資格があると会長から説明があり拍手でもって承認され、檀上で推戴状が津谷会長から贈呈された。

報告連絡事項では、本年11月22日(土)に福岡で行われる2014年会(大会長:九大医学研究院臨床薬理学 笹栗俊之教授)についての紹介があり、特別講演2題及び一般演題を15題程度募集する。また、翌日23日に薬史ツアーとして九大医学歴史館や中富記念くすり博物館などの見学を予定している等の説明があった。

支部報告として、北海道支部(高田昌彦支部長欠席のため三澤総務委員長)、中部支部(河村典久支部長)、関西支部(宮崎啓一支部長)から報告があり、



名誉会員に推挙された奥田 潤先生(右)



懇親会場風景

各支部の活動の状況が紹介された。

総会では各種の報告などが豊富にあったため、予定の時間がやや超過し閉会に至ったのが午後3時40

分頃であった。休憩をはさんで下記の公開講演が2題行われた。講演終了後、午後6時20分過ぎから山上市会館で恒例の懇親会が行われ多数の会員が出席した。

日本薬史学会 2014年度公開講演会

薬史との係わり60年

演者 山川浩司(前日本薬史学会会長)

編集委員 砂金信義

2014年に設立60周年を迎える本学会の歩みを「薬史との係わり60年」の演題で日本薬史学会名誉会員、前本学会会長である山川浩司先生が講演された。講演に先立ち座長の本学会理事松本和男先生から、長きにわたるご自身との係わりを含めて演者の略歴が紹介され、講演は開始された。講演では、演者ご自身の有機化学研究・教育と薬史学との係わりを織り交ぜ、学会発足の経緯から、その泰明期を経て60周年を迎える今日まで日本薬史学会の来歴が語られた。

薬史学会の発端は、東京大学薬化学研究室における若き薬学研究者達との出会いであった。「新しい薬学」を議論する中で、日本の薬学史に及び、科学史連合シンポジウムでの発表を端緒に、薬科大学教授、病院薬局長ら140名を発起人として日本薬史学会の設立の運びとなり、1954年に設立大会が開催され、日本薬史学会雑誌が発刊された。日本薬史学会創立大会懇親会に出席した薬学を担う蒼々たるメンバーによる寄せ書きがスライドで紹介された。演者は、その後の薬史学会の運営に参画し、1956年(昭和31年)の学会開催の折に「くすり史跡めぐり」が開催され、学会旗の旗持ちとして参加したが、史跡巡りはその後の医薬史跡の探訪の切っ掛けとなり、このイベントは、その後各地で開催される年会においても引き継がれている。

演者は、若くして東京理科大学薬学部教授として赴任し、専門である有機化学の他に「薬学概論」の授業を担当したが、この講義は、医薬品産業史研究と薬学教育を考える契機になった。医薬品産業史に



公演中の山川浩司先生

については、日本薬史学雑誌の40周年記念号に諸氏の分担を得て幕末から1990年始めまでの医薬品開発の歴史が日本医薬品産業史として掲載され、その後40周年記念事業として「日本医薬品産業史」として薬事日報社から刊行されるに至った。

日本薬史学会は、発足以来常任理事による手作り学会として運営され、雑誌の刊行・発送も自前で行われた。この間、中国を訪問し、中国薬史会との懇談や欧州・北欧研究旅行なども企画実行された。1993年にアジアでは初めて開催された国際薬剤師大会(FIP)東京大会において、薬史部会を担当した。2004年には、創立50周年を迎え、「日本薬史学会五十年史」が刊行された。

薬史学研究的発表の場としては、日本薬学会の1部会として薬史学部会が開催されていたが、2001年に日本薬史学会として独自の年会を開催することとなり、第1回年会(2001年会)が演者を大会会長

として東京理科大を会場に開催された。以来各地で開催され、本年11月には2014年会在九州大学を会場に開催される。

薬史学教育について、薬史学会創設以来、薬史学教育とは、その講義はどうあるべきか等々議論されてきたが、十分な結論は得られていない。昭和期に出版された薬史学図書は、自身の博士論文となる清水藤太郎著の「日本薬学史」を始め、何点かあるが、

比較的新しい「国際薬学史」(山川浩司著、2000年、南江堂)ですら絶版で、入手が困難な状況にある。演者は、薬史学教育を全薬系大学・薬学部で実施することを目指す運動の必要性を指摘して講演を終えた。この指摘に関して、講演後フロアから「薬学史」を薬剤師国家試験の出題項目とすべきであるとの言が寄せられた。

日本薬史学会 2014年度公開講演会

ICHの形成にたどるわが国医薬品の国際展開

演者 黒川達夫(慶應義塾大学薬学部教授、元厚生労働省大臣官房審議官)

編集委員 荒木二夫

演者・黒川達夫先生は、厚生省(現厚生労働省)に入局してからWHOに出向されるなど国際協力に係る業務に携わっていた。その経験をかわれICHの準備段階から日本代表として参画し、その基礎固めに貢献してこられた。本日はICHの創立時の国際情勢や経緯をたどる講演であると座長の平林敏彦企画委員長から演者の紹介があった。

ICHとは、日米EU医薬品規制調和国際会議 International Conference on Harmonization of Technical Requirements for Registration of Pharmaceuticals for Human Useの略である。新医薬品の開発力を有する日本、米国と欧州連合の規制当局と製薬企業団体が立ち上げた国際会議で、すでに四半世紀の歴史を有する。この会議で検討、合意された事項は、それぞれの国、地域に持ち帰られ、ガイドラインGLとして発出される。このGLは、医薬品開発や市販前・市販後の安全対策、医薬品の品質確保などの上で、実質的なゴールドスタンダードとなっている。

演者・黒川達夫先生は、厚生省(現厚生労働省)に入省してからWHO(ジュネーブ、マニラ)に出向されるなど国際協力に係る業務に携わっていた。その経験をかわれICHの準備段階から日本代表として参画し、その基礎固めに貢献してこられた。本



公演中の黒川達夫先生

日はICHの創立時の国際情勢や経緯をたどる講演であった。

1980年代は、日本は多くの産業分野での成長が著しく、バブル景気も華やかで購買・消費力が高まっていた。医薬品の分野では、1985年・3兆380億円が91年には4兆8100億円と増加し、世界市場の約20%を占める医薬品の消費国であった。ちなみにその頃の世界医薬品市場の74%は日米欧で占められていた。一方、国内独自の規制が行われていたため、外国企業の参入は容易ではないと米欧から日本の市場開放を求める声が高まっていた。

当時、わが国の臨床評価方法は、“著効”、“有効”、

やや有効”、“無効“という主治医判定が主流であり、客観性、国際共通性があるものとはいえなかったのも事実であった。また、わが国では1990年から、いわゆる旧GCPが施行されたが、総括医師制度を基本とし、被験者の同意は口頭同意も可とするもので国際ルールには合致しないものであった。

ICH-特が始まるまでの1年6ヶ月でICHの枠組みがおおよそ決まることになるが、日本側は多くの提案をし、採用された。まず「言葉のハンディキャップなく貢献したいので、会議の公用語に日本語も採用して欲しい」と主張し、認められ、第3回の会合までは、200人規模の会議で英語に加えて日本語が飛び交っていたという。ICHにおける検討課題（トピックス）の候補は、実際各領域に新薬製造販売承認を申請して問題に遭遇した経験のある製薬企業側が用意し、その中から公衆衛生上インパクトのある課題を順に選ぶのは主に規制当局側の責任とされた。トピックスについて、ステップ1からステップ5に至るアプローチもこの段階で合意された。会議で合意されたガイドライン(GL)を基に作成された

データは、お互いに受け入れること、しかし、GLは各国の規制を侵すものではない。この中で我が国は、不要な妥協はしない、国民の保健衛生を守ることを基本原則として活動してきた。

1990年4月、ブリュッセルのEFPIA（欧州製薬団体連合会）会議室で準備会議が開催され、11月には、第1回総会が開催された。メンバーは、日本の厚生省、日本製薬工業協会、米国及びEUの規制当局と製薬企業団体であり、その他にオブザーバーとしてWHO（世界保健機関）、EFTA（欧州自由連合）、カナダも参加した。その後、多くの事項についての国際統一(GL)が決められ、活用されている。今後は、BRICsの加入に向け、対応していかなければならない。

4半世紀にわたるICH国際会議の成果によって、新薬開発の多くのデータが、各国の申請資料として共通に採用されるまでには、そのルール作りに汗を流した人が存在するということを改めて認識させられた貴重な講演であった。

2015年度日本薬史学会賞など受賞候補者推薦の公募（お知らせ）

日本薬史学会会長 津谷喜一郎

日本薬史学会では2015年度の日本薬史学会賞などの受賞候補者の推薦の公募を行っています。推薦者は自薦・他薦を問いませんので、下記の本学会表彰規定（抜粋）をご参照の上、2014年10月31日までに、本学会事務局宛に推薦書類など必要書類の提出をお願いします。

1. 表彰の種類：

表彰は次の3種類について行う（授賞対象者は本学会員に限る）

- 1) 日本薬史学会賞
（薬史学に関する学術の進歩発展に顕著な功績をなした者に授与する）
- 2) 日本薬史学会奨励賞
（本学会の活動において顕著な貢献の可能性を

示している者あるいは活発な研究発表を行っている者に授与する）

3) 日本薬史学会特別賞

（高度な学術的貢献または本会の維持運営に特に功績のあった者に授与する）

2. 選考の方法：

- 1) 受賞者選考のため選考委員会（本学会会長および理事5名で構成する）を設置する
- 2) 選考委員長は本学会会長があたる
- 3) 選考の対象となった者は選考委員になることはできない
- 4) 受賞者は選考委員会での選考を経て本学会理事会で決定する

3. 推薦の方法および時期：

1) 推薦者(自薦・他薦)は本学会会員であり、2014年10月31日までに下記の推薦様式に従い、日本薬史学会事務局に郵送で申請する

2) 推薦様式

推薦書類は、A4版用紙に記載すること

(1) 推薦書(2ページ以内で次の内容を含む)

A 被推薦者の氏名、所属、職名

B 推薦する理由(業績タイトルをつける)

(2) 被推薦者の履歴書(1ページ)

(3) 関連する業績リスト(形式不問)

(4) その他の必要事項(資料・コピーを含む)

3) 推薦書類の送付先

113-0032 東京都文京区弥生2-4-16

(助学会誌刊行センター内) 日本薬史学会事務局

会長 津谷喜一郎

TEL.03-3817-5821

北海道支部だより

2014年度北海道支部報告

北海道支部常任幹事 関川 彬

昨年の日本薬史学会年会を終え、北海道支部は新たな問題に直面している。齋藤初代支部長の死去に続き、高田支部長、吉沢支部長代行の体調不良と組織の運営に大きな課題もっています。日本薬史学会の構成員が比較的高齢者を中心としている問題を実感するものです。そのような中で、今年度の計画は次のようになっています。

第61回北海道薬学大会(登録名:「薬史学会」)

5月24日～25日、札幌コンベンションセンター

総会: 報告(事業、会計、監査)および計画(事業、会計、その他)

特別講演、会員発表なし

第9回北海道医史学研究会・日本薬史学会北海道支部合同学術集会 秋

北海道支部発足10周年記念誌発行 秋

中部支部だより

2013年度の活動報告(中部支部例会、講演会)

日本薬史学会中部支部長 河村典久

2013年11月17日(日) 13:30～19:00

場 所: 名城大学名駅サテライト・多目的室

講演会 13:40～

・演題1:「中国の薬研の歴史—後漢より明の時代まで—」

○奥田 潤(名城大学薬学部)、森田 宏(内藤記念くすり博物館)

・演題2:「伊藤圭介と植物図説雑纂」

○河村典久(金城学院大学非常勤講師)

・演題3:「キニーネ —歴史に影響を与えた分子—」

○桐原正之(静岡理工科大学)

講演会には北陸地区、関東地区からの参加を含め10名でありましたが、内容は充実し各40分ほどの講演に対して15分ほどの活発な質疑応答がありました。

講演会終了後、支部としては初めての懇親会を行ったところ7名の参加を得て親交を深めることが出来ました。

2014年度の活動計画

春の開催について、薬史学会では、8月2日に金沢大学(御影雅幸先生)において『柴田フォーラム』が開催される予定で、これを春の北陸支部の講演会として開催することとしました。

中部支部例会講演会の開催予定

開催予定日時：2014年12月6日(土)午後4時を予定しております

開催予定場所：名城大学名駅サテライト・多目的室(名古屋市中村区名駅3-26-8)

現在のご講演予定は名古屋市立大学薬学研究科医療機能薬学専攻 生薬学分野教授・牧野利明先生を予定しておりますが、会員の方でご講演ご希望の先

生は、事務局までお知らせください。演題、開催日時の詳細については次号薬史レターでお知らせいたします。

研究発表演題申し込み締め切り：2014年7月31日

中部支部事務局

日本薬史学会・中部支部事務局長 飯田耕太郎
名城大学薬学部 薬学教育開発センター 教育開発部門

〒468-8503 名古屋市天白区八事山150

TEL：052-839-2710(直通)

FAX：052-834-8090

E-mail：iida@meijo-u.ac.jp

薬史学雑誌の投稿規定

(2014年12月改訂)

編集委員会委員長 西川 隆

日本薬史学会編集委員会では、かねてより「薬史学雑誌」の投稿規定の改訂作業を続けてきましたが、常任理事会の承認を得ましたので、第49巻第2号(2004年12月発行予定)から下記の投稿規定を実施します。

1. **投稿者の資格**：原則として筆頭著者は本会会員であること。会員外の場合は、編集委員会の承認を経て掲載することがある。
2. **著作権**：本誌に掲載された論文の著作権は日本薬史学会に属する。
3. **原稿の種類**：原稿は医薬の歴史、およびそれに関連のある領域のもので、個人情報保護に配慮されたものとする。ただし他の雑誌など(国内・国外を問わない)に発表したもの、または投稿中のものは受け付けない。
 - a. **原著**：著者が医薬の歴史に関して新知見を得たもの、医薬に関係した人、所、事跡等に関する論考等で和文、英文のいずれでもよい。原則として図版を含む刷り上がり8ページ(英文も8ページ)を基準とする。
 - b. **総説**：原則として編集委員会から執筆を依頼する。一般会員各位からの寄稿を歓迎するがその際はあらかじめ事務局に連絡すること。刷り上がり8ページを基準とする。
 - c. **研究ノート**：原著にくらべ簡単なもので、断片的あるいは未完の研究報告でもよい。和文・英文どちらでもよい。図版を含む刷り上がり4ページを基準とする。
 - d. **資料**：医薬に関する資料、関係外国文献の翻訳などで和文、英文のいずれでもよい。原則として図版を含む刷り上がり6ページ(英文も6ページ)を基準とする。
 - e. **記事**：見学、紀行、内外ニュースなど会員の寄稿を歓迎する。刷り上がり2ページを基準とする。
4. **原稿の作成**：
 - a. **和文原稿**：和文原稿は、ワードプロセッサ(A4, 12ポイント, 横書35字×30行)または400字詰原稿用紙によるものとする。平かな混じり横書きとし、かなづかいは現代かなづかいを、MS明朝体または楷書体を使用する。

JIS第2水準までの漢字以外の文字については、別途、著者に相談して処理する。

b. 英文原稿：英文原稿は、A4版の用紙を用い、原則として、1行約65字、1頁に25行、ダブルスペース(1行おき)で印刷すること。英文原稿は、あらかじめ英語を母語とする人、またはこれに準ずる人に校閲を受けておくこと。

c. 原稿の体裁：すべての原稿には、和文で連絡著者名と連絡先の住所、電話番号、FAX番号、E-mail アドレスおよび別冊請求先を記載したカバーレターを添付すること。また特別掲載を希望する場合はその旨を朱記すること。

原稿の第1ページには、論文表題、著者名、所属、所在地を和文および英文併記で記載する。雑録を除く原稿の第2ページには、簡潔な英文要旨(250語程度)およびその対訳の和文要旨(300字程度)ならびにタイトル・要旨から選択した5語以内のキーワードを和文・英文で作成し記載すること。

第3ページ以後は本文とし、原則として、緒論、方法、結果、考察、結論、謝辞、文献の順に記すこと。

d. 参考文献：基本として、医学雑誌編集者国際委員会(ICMJE)統一投稿規定(2010年改訂版)(http://www.honyakucenter.jp/usefulinfo/pdf/uniform_requirements2010.pdf)のスタイル(Vancouver style)に準拠する。本文中に参考とした文献などは、引用順に通し番号を付し、論文末尾に次の要領で一覧にして表示すること。著者名が6名を超える場合は、筆頭6名を記し、あとは「他」又は「, et al.」と記載する。

(1) **雑誌の例示：**著者名. 題名. 雑誌名. 年次; 巻(号): ページの順に記す。なおページ数は始まりと終わりを示すが、最終ページは最初ページ数と重複しない数字のみを示す。電子雑誌などで、ページのない場合は、記事番号などを記述する。雑誌名の略名は、Index Medicus に準ずる。

1) 寺岡章雄, 津谷喜一郎. 日本の薬系大学における「ドライラボ」の過去・現在と今後の課

題. 薬史学雑誌. 2012; 47(1): 67-89

2) Podolsky SH, Greene JA. A historical perspective of pharmaceutical promotion and physician education. *JAMA*. 2008; 300(7): 831-3. doi: 10.1001/jama.300.7.831.

3) Okuda J, Noro Y, Ito S. Les pots de médicament de Yakushi Bouddha (Bouddha de la Guérison) au Japon. *Revue d'Histoire de la Pharmacie*. 2005; LIII (No. 345): 7-32

(2) **単行本の例示：**著者名. 題名. (編者名). 書名. (外国のみ)発行地, 発行所, 年次, 該当ページを記す。

1) 西川 隆. くすりの社会誌: 人物と時事で読む33誌. 薬事日報社, 2010. p. 119-27

2) 奥田 潤. くすりの歴史; 日本の薬学; 薬師如来像とその薬壺への祈り. In: 湯之上 隆, 久木田直江(編). くすりの小箱, 南山堂, 2011. p. 2-27; p. 30-41; p. 144-56

3) Harrison BR. Risks of handling cytotoxic drugs. In: *The Chemotherapy Source Book*, 3rd ed. New York: Lippincott Williams & Wilkins, 2001. p. 566-80

(3) **電子図書の例示：**著者名, ウェブページの題名, ウェブサイトの名称, 更新日付け, (媒体表示), 入手先, アクセス日. ブログの場合はブログ名と更新日付けを入れることが望ましい。

1) Belar C. Models and concepts. In: Lewelyn S, Kennedy P, editors. *Handbook clinical health psychology*. New Jersey: Wiley Inter Science. 2004. p. 7-19

<http://www3.interscience.wiley.com/cgi-bin/summary/109870615/SUMMARY>. doi: 10.1002/0470013389.ch2 (accessed 10 May 2014)

(4) **「新聞」, 「ホームページ」の例示：**発行日・アクセス日を記載する。

1) 川瀬 清. 日本薬史学会創立50年に思う—その歴史・創立当初と薬史学—. 薬事日報, 2010.7.5. p. 10-1

2) 厚生労働省. 治験ホームページ. <http://www>.

mhlw.go.jp/topics/bukyoku/isei/chiken/index.html (accessed 10 Oct 2012)

5. 原稿の送り先：

a. e-mail による投稿：下記に送る.

e-mail : yaku-shi@capj.or.jp

本文は Word ファイル, 表は Word ファイルまたは Excel ファイル, 図・写真は JPG ファイルにて作成すること.

b. 手書き原稿による投稿：本原稿1部, コピー2部を下記宛に書留で送ること.

113-0032 東京都文京区弥生2-4-16, (財)学会誌刊行センター内, 日本薬史学会

封筒の表に「薬史学雑誌原稿」と朱書すること. 到着と同時に投稿者にその旨通知する. なお, 原稿を収載した CD-R や USB スティックを添付することが望ましい.

6. 原稿の採否：投稿にあたって著者は原稿の区分を指定できるが, 最終的な採否および区分は, 編

集委員会が決定する. 採用が決定された原稿は, 原稿到着日を受理日とする. 原著, 総説, 研究ノートについては, 編集委員会が複数の審査者に査読を依頼する. すべての原稿について, 修正を求められることがある. 修正を必要とする原稿の再提出が, 通知を受けてから3か月以後になったときは, 新規投稿受付として扱われる. また, 編集技術上必要があるときは原稿の体裁を変更することがある.

7. 正誤訂正：著者校正を1回行う. 著者校正は印刷上の誤植を訂正するに留め, 原稿の改変や, その他の組み替えは認めない. 論文出版後著者が誤植を発見したときは, 発行1か月以内に通知されたい.

8. 特別掲載論文：投稿者が特に発表を急ぐ場合は, 特別掲載論文としての取扱いを申請することができる. この場合は印刷代実費を申し受ける.

9. 投稿料, 別刷料および図版料：

特別掲載論文以外の投稿論文は, 次の各条項に

1 ページ当たりの単価 (円)

論文の種類	刷上がりページ	電子媒体なし		電子媒体あり	
		(和文)	(英文)	(和文)	(英文)
原著	6 ページまで	3,000	3,500	3,000	3,500
	超過分	5,000	5,500	4,000	4,500
その他	6 ページまで	1,500	2,000	1,500	2,000
	超過分	5,000	5,500	4,000	4,500

よって個別に計算する.

(1)原稿の種類が, 原著かその他(総説・史料・ノート・雑録など)のいずれか

(2)原稿の刷り上がりの長さが基準以内か, それを超えているか

(3)e-mail添付の Word ファイル, または CD-R や USB スティックなどの電子媒体の添付があるか否か

(4)請求金額の基準 (1 ページ当たりの単価)例示

(5)図表などの写真製版料, 別冊印刷・製本料については, 別に実費を申し受ける. 別冊の希望部数については, 投稿の際に申し込むこと.

10. 発行期日：原則として年2回, 6月30日(原稿

締切：3月15日)と12月30日(原稿締切：9月15日)を発行日とし, 発行日の時点で未掲載の投稿原稿が滞積している場合は, その中間の時期に1回限り増刊発行することがある.

11. この規定は, 第49巻第2号(2014)より実施する.

第1版	10 (1)	1975.4
第2版	23 (1)	1985.4
第3版	25 (1)	1990.4
第4版	26 (1)	1991.4
第5版	30 (1)	1995.4
第6版	38 (1)	2003.4
第7版	49 (2)	2014.12

薬史レター（旧薬史学会通信）全号をホームページに掲載

広報委員会委員長 折原 裕

日本薬史学会のホームページでは出版物として、薬史学雑誌と薬史レター（旧薬史学会通信）の二つのページがあります。薬史学雑誌には全号の目次情報が、また、薬史レター（旧薬史学会通信）のページ(<http://yakushi.umin.jp/publication/letter.html>)には全号のPDFファイルが2013年8月より掲載されています。全号掲載に当たり、PDFファイルとして印刷用のファイルが残っていた56号以降はそのまま、それ以前の号については三澤副会長が個人的に保管していたものをスキャンして画像ファイルのPDFとして掲載しました。

掲載後しばらくして国会図書館より薬史レター（旧薬史学会通信）をオンライン資料として活用したいとの申し入れが学会にありました。しかしながら、画像ファイルのPDFには保管のためのパンチ穴の

影や書き込み、汚れなどがそのまま残っており、全国的に利用・活用され、あるいは記録されるには不相当と判断し、修正作業を行うこととなりました。資料を保管していた三澤副会長のご尽力により、1ページごとの画像ファイルをPhotoshopにて不要部分を修正し、また写真などの明るさを補正していただきました。

2014年4月以降は全号の薬史レター（旧薬史学会通信）をきれいな状態で閲覧することができるようになっていきます。画像ファイルのPDFファイル(1～55号)についてもAcrobat上のOCRで文字情報をできるだけ含むようにしてありますので、ファイル上での文字列検索が可能です。また、将来的にはweb上での検索にもかかるようになると思います。

ソウルでの大韓薬学会薬学史分科学会設立記念シンポジウム

日本薬史学会会長 津谷喜一郎

表記シンポジウムが2014.4.18(金) 9:00-12:25に、韓国・ソウルのThe K Seoul Hotel (旧・教育文化会館)で開催された。大韓薬学会 (Pharmaceutical Society of Korea: PSK) は年に2回春と秋に学術総会を2日間にわたって開催する。4.17-18で参加者数は約1,400人とのことである。PSKは2007年から日本薬学会 (Pharmaceutical Society of Japan: PSJ) と交流協定書を交わし相互交流が盛んで、今学術総会にはPSJ会頭の柴崎正勝氏が参加し、また東京大学薬学系研究科教授で研究科長の嶋田一夫氏が初日に特別講演をされていた。Proceedingsはすべて英語でありabstractはCDを配布し、韓国語に限られるがwebsiteでも見ることができる。

本シンポジウムは2日目午前に開催され、PSK会長のSuh Young-Gerの祝辞にはじまり、ソウル大学薬学部名誉教授のShim Chang-Koo (沈昌求)と

同・教授 Kim Hun-woong (全鎮雄) 両氏の司会の元、以下の8つの報告が行われた。1) 韓国薬学教育の歴史と薬学史分科学会のビジョン (Shim Chang-Koo)、2) 韓国薬事制度の歴史 (Joo Seung-Jae)、3) 韓国製薬産業100年史 (Lee Jong-Woon)、4) 韓国での新薬開発の歴史 (Lee Jong-Wook)、5) 韓国GMPの歴史 (Paik Woo-Hyun)、6) 韓独医薬博物館の歴史 (Lee Kyung-Lock)、7) 祝辞と日本薬史学会紹介 (津谷喜一郎)、8) 祝辞と中国薬学会薬学史専門委員会の紹介 (Hao Jinda 郝近大)。

学術大会とは別途、スライドなどを含んだproceedingが配布された(東大の薬史学文庫に所蔵される)。参加者は約50人。このシンポジウムを企画・組織された薬学史分科学会 (Division of Pharmacy History in Korea: DPHK) 初代会長の沈氏によれば、本来は1日かけてゆっくりと開催した



写真第1列目は、左から、池亨俊 (Seoul大名譽教授)、沈昌求 (大韓藥學會藥學史分科學會長、Seoul大名譽教授)、郝近大 (中国药学会药学史专业委员会委员长)、津谷喜一郎 (日本薬史学会会長)、李相燮 (Seoul大名譽教授)、金洛斗 (Seoul大名譽教授)、李殷芳 (Seoul大名譽教授)、李康樞 (新藥開發研究組合會長)、白宇珪 (韓國 PDA 會長)

かったが、学術総会の初日 (4.17) の総会でまず分科学会が承認され正式に設立された後の開催で、半日となり、やや盛りだくさんとなった、とのことである。

韓国の沈氏は日本薬史学会の2007年の公開講演会で特別講演を、また中国の郝近大氏は2012年の柴田フォーラムで講演され、それぞれ薬史学雑誌に論文が掲載されている。今回、初めて日中韓の薬史学会関係者が集まり、3者により今後交流を強化

し研究や教育を深化向上させようということになった。

なお、初日夜の約400人の宴会は、薬学生バンド、女子薬学生のK-popダンス、プロの男女オペラ歌手 (女性はKang Myung-Sook) の唄、セクシーな衣装のプロのダンスが披露され、日本とはやや趣が異なった。会場はソウル市内であるが森林に囲まれており、連翹がまだ咲いていた。

〔Book紹介〕

山内一也・三瀬勝利 著

「ワクチン学」

A5版 227頁 4,200円 (岩波書店)

本書は、2014年2月刊行された。その帯には、「ワクチン後発国」から脱却するための入門書と紹介されている (写真)。

まえがきには、「筆者らの研究人生は、そのほとんどがワクチンとともに歩む日々であった。ワクチンの歴史を振り返り、今後の展望を眺めてみた結果、ワクチン学の領域が予想をはるかに超えて急速に進展しつつあることを改めて驚かされている」と記されている。目次は、1. 古典的ワクチンの時代、2. 近代的ウイルス・ワクチンの時代、3. 細菌学の進展と細菌ワクチン、4. 新しいワクチン開発、5. 動物用ワクチンと続いている。ジフテリア、百日咳、破傷風等の患者数と死亡数の推移とワクチン接種開始後の大幅減少のグラフも適宜提示されている。

また、B型肝炎、ヒトパピローマ、新型インフルエンザ、肺炎球菌、ロタワクチン等の開発経過や今後開発が期待されるアルツハイマー病やアレルギー等のワクチン開発の将来展望についても著者の考え



が記されている。ワクチン学の進歩に貢献された弘好文、橋爪壮、近藤昭、高橋理明、佐藤勇治、堀田進博士らの写真と新発見等の貢献のストーリーも解説されており、興味深い。

第6章では、「日本における予防接種の現状とワクチン行政の欠陥-米国との比較」のタイトルで、予防接種の面で日本が抱えている問題点が纏められている。特に日本版 Advisory Committee on

Immunization Practices (ACIP) の設立が急務であることが指摘されている。

本書は、ワクチン学の歴史を知る上でもインパクトのある貴重な専門書で、薬史学会会員にも有用な書と考える。また、大学院生や若き研究者にもこれからの研究の方向性や考え方に多くの示唆を与えてくれるバイブル書となる事が期待される。

(森本和滋)

〔Book紹介〕

B. R. Tomlinson 著

The Economy of Modern India from 1860 to the Twenty-First Century 2nd Edition

A5版 251頁 \$32.99 (Cambridge University Press) 2013刊

著者である B. R. Tomlinson は、ロンドン大学東洋アフリカ経済史学部の名誉教授である。また、東洋アフリカ研究学における仏教研究と、それに関連するエリアについての研究促進活動を、長年にわたり行ってきた人物である。

本書では、急速な経済成長を遂げているインドを、過去150年の統計に遡り、グローバル、リージョナル、ナショナル、ローカルの「四層構造」の視点で包括的で広範囲にわたり統計的根拠に基づき分析している。

巻頭には図、地図、表の目次が記載され、時代別に次のような構成をとる。第1章：発展まで 第2章：1860-1950年代の農業経済、土地、労働者の国家統治 第3章：1860-1945年代までの貿易と生産。市場における物価の安定 第4章：国家と経済 第5章：1980年代からの経済発展。したがって内容的には、政治的なヒエラルキーの堅い社会構造を抱えるインドが、19世紀から第二次大戦までの徹底した合理的支配によるイギリス植民地政策の影響下から、現代の製造業における経済成長と、それに続く開発への取り組みを解説している。

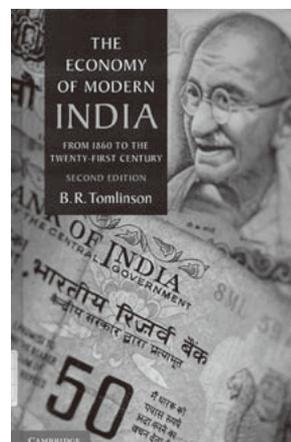
インドの北西部の丘陵地はヒマラヤ山脈の南斜面にあたり、アーユル・ヴェーダで用いる薬用資源の宝庫といわれていた。しかし、紅茶生産による利益を見込んだイギリスは、周辺の樹木を一切切り倒して、茶畑

にするという徹底した支配を行った。このような史実を裏付ける農業経済分析は、第2章で解説されている。

現代インド薬学史を研究するにあたり、独立後のインド製薬業界の状況を把握することは必須である。しかし、インド国内においては、それに関する資料は意外に少なく、イギリスから取り寄せることで、独立前後の製薬業界と社会情勢の関係は、史実として研究されてきた。

そのようなことから、本書はインド経済史だけではなく、他分野の研究における社会分析精度を高めるものとして大変有用である。それだけではなく、従来の伝統的な歴史学研究をアジア地域研究の観点から見直し、新たな研究の切り口を多く提示しているといえよう。

(夏目葉子)



薬史往来 認識と歴史

帝京平成大学薬学部 鈴木達彦

このたび「薬史往来」に寄稿する機会をいただき感謝を申し上げたい。ただ、私は薬学の歴史を研究しようと強く志したわけではないので、自身の薬史学についての見解を述べるなどおこがましいように覚える。学生の頃から歴史は得意でなかったし、今でも歴史は「勉強」するだけでは成立しないと思っている。

薬学部に入學して漢方など伝統医学に興味を抱き少しずつ研究をしてきた。まだまだ駆け出しだが今日まで続けてこられたのは幸いである。そのなかで古来より綿々と受け継がれてきた医学の理論を明らかにするならば、薬学史、医学史に向き合うことは必要であると考えたし、実際に用語1つをとってみても、時代により認識が異なり、意味合いが随分と異なっていることも少なくなかった。文献にあたるにしても、それがどのような経緯で成立し、いかなる医学背景、薬学的水準のもとに書かれたかを認識することが重要であって、文字面だけを「勉強」しては到底正確には理解できない。

歴史研究は過去にあった物事を対象とすることはもちろんである。しかし、今日目にするものは、物事の当事者が足跡を残したものであり、そこには必ずバイアスがかかっていると考えるてはいけない。例えば、現在起きている事柄について、今日の我々は未来永劫通ずる評価を下せるであろうか。仮に残したとしても、移り変わる時代のなかで正確に伝わらなかったり、時には権力や状況によって書き換えられることもありうる。当事者として今を残すにも、時を隔てて過去の物事を読み解くにも認識が要求される。

過去の物事は確かに存在したけれど、それを見た目は例外なく失われてきた。今はその媒介しかなく、それを現代の目で見たものが歴史であろうかと思う。歴史とは過去のものではなく、現代を投影したものといってもよいのではないだろうか。認識はその時々で求められていて、今日の薬学者の視点に立ったときに、はじめてそれは薬学史となる。

薬史レターへの投稿をお待ちしています

薬史に関するエピソードをはじめニュースや図書紹介などなど、会員からの投稿をお待ちしています。送り先は日本薬史学会事務局宛にお願いします。図書紹介は表紙をスキャンなどしてお送り戴ければ有難いです。次号(第72号)は2014年9月発行予定(締め切りは7月末日)です。

日本薬史学会編集委員会

編集委員長：西川 隆

編集委員：荒木 二夫 小清水敏昌 砂金 信義 ヨング・ジュリア

薬史レター 第71号 2014年6月

編集人：西川 隆 発行人：津谷喜一郎

日本薬史学会 The Japanese Society for History of Pharmacy (JSHP)

〒113-0032 東京都文京区弥生2-4-16 (助学会誌刊行センター内) 日本薬史学会事務局

tel: 03-3817-5821 fax: 03-3817-5830 e-mail: yaku-shi@capj.or.jp http://yakushi.umin.jp